

第1楽章 アレグロ・コレリーコ

胆汁質の楽章。ソナタ形式。作者は先に述べた絵について「胆汁質の男は馬に跨っていた。手には長い剣を持ち、髪は顔の周りで激しく踊っていた。その形相は余りの怒りと憎しみに満ちていたので、私は思わず笑い出してしまった。」と後に語っています。

胆汁質の象徴である、怒りや力強さを備えた口短調の強烈な第一主題で曲は始められます。クラリネットによって示される小主題を交えながら一度曲が盛り上がった後、穏やかな第二主題がオーボエによって紡がれ、しばらく緩やかな気分が続くかと思われそうですが、そこは胆汁質。変化に富む感情を見せながら時には雄大な姿をも見せつけます。

提示部が終わり展開部に入ると、先程の主題群の断片が随所に散りばめられます。時に激昂し、時にそれを後悔し落ち込みますが、すぐにまた我を忘れて憤怒へ舞い戻ることになります。そして冒頭と同じ感情を備えた激情の再現部を迎え、湧き起こる衝動と我に返った時の虚無感を行きつ戻りつしながらコーダへと駆け抜け、この荒々しい楽章は締めくくられます。

第2楽章 アレグロ・コーモド・エ・フレマティコ

胆汁質と対をなす粘液質の楽章。ニールセンはこの楽章の登場人物に関して非常に詳しい描写をしています。描かれたのは自信に満ちた若くて大柄な男の子。彼は学校の授業に全くついていけませんでした、とても牧歌的で、皆から好かれていました。彼が好きだったのは、鳥が歌い、魚が音もなく水を泳ぎ、太陽の光の中で髪に風を受けながら寝転がることでした。彼は踊ったりする程積極的ではありませんでしたが、ゆったりとしたワルツに身を任せることはとても上手だったことでしょう。

第2楽章の冒頭はそのようなワルツから始まります。彼が軽く体をゆらすような情景がしばらく描かれた後、木管楽器とヴィオラによる比較的軽やかなリズムの場面に移ります。この楽章の中で1カ所だけ、ティンパニと木管によって、fで大きな音が鳴らされる所がありますが、何があったのでしょうか。船から樽でも落ちたのでしょうか。何にせよ一時の驚きはすぐに静まり、彼も水面も皆静寂の中にまどろみます。

第3楽章 アンダンテ・マリナーニョ

憂鬱質の楽章。3部形式。憂鬱質は天才にも通じる気質であり、深い内省を特徴とします。この楽章で描かれるのは、憂鬱質の男の心の奥底に現れるであろう深遠な光景。短い導入部の後、激しい苦悩の主題がヴァイオリンによって叫ばれます。時折り希望の光が射してくるようにも見えますが、やはりそこでも根底に深い悲しみが横たわることを知るので。次にオーボエによって溜め息にも似た旋律が奏でられ、様々な楽器に受け継がれます。嘆きが頂点に達すると、フルートが苦悩を慰めるかのように穏やかな旋律を歌います。裏に悲しみを秘めながらも静けさを保ち、網の目のように旋律が紡がれゆく中、突然苦悩の主題が再度叫び声をあげます。悲哀に満ちたこの楽章はどうなるのでしょうか。最後にひと際狂おしい叫びが聞こえた後、曲は居場所を求めるように終焉へと向かいます。

第4楽章 アレグロ・サンギネオ

憂鬱質と対をなす多血質の楽章。ロンド形式。「フィナーレで私が描こうとした男は、全世界が自分のものと信じ、考えなしに飛び出してしまうような男である」とニールセンが語るこの楽章は随一の無邪気さを誇ります。ティンパニの号令によりオーケストラ全体が駆け出し、最早留まることを知りません。もちろん彼も驚いたり怯えたりすることはありますが、それは表面上だけのこと。陽気な性格は少しも揺らいだりはありません。

ただ、ただ一度だけ、彼は心から真剣に向き合えるものと出会います。その場所は弦楽器によって対位法的に描かれており、悲しみを湛えているようにも見えますが、そこには神聖な光が射し、彼は自分ではないものへと真摯に思いを巡らせるのです。その後、帰ってきた彼は初めの彼とはどこか違います。陽気さを携えつつも、ただ軽かっただけの昔とは違う威厳に満ちた行進によって、交響曲はフィナーレを迎えるのです。

(文責：志方洋介)